

『明代とは何か』（初版第1刷）正誤表

- p.11 1.3 ペルシア語が「オルトク」、トルコ語では「オルターク」
→ トルコ語が「オルトク」、ペルシア語では「オルターク」
- p.15 1.1 い。「ジャムチ」の「チ」は複数形で、ジャムに漢字をあてると「站」になる。
→ い。漢字をあてると「站」になる。
- p.25 1.8-9 生前から諡号をつけるのが慣例化……、いたずらに冗長な称号となった
→ 生前から尊号を重ねるのが慣例化……、死後いたずらに冗長な諡号となった
- p.117 1.7 復し、インフレになっていた → 復していた
- p.131 1.4 モンゴル時代にインドから伝来した木綿、綿花の栽培が普及した。
→ インドから伝来した綿花の栽培・木綿の生産がモンゴル時代、本格的に普及した。
- p.131 1.8 農業の副業として → 農業経営の副業として
- p.140 1.3 転任すればたちまち使えなくなって → 転任すれば使えなくなって
- p.157 1.13-16 たとえば田産を寄進することを「詭寄」といい、身体ごと隷属するのを「投献」という。前者はいつわっての寄進、後者は字面としては、献身とおなじ意味ながら、われわれの使う譬喩的な「献身的」とは意味がちがって、ほんとうに身をあずけて隷従してしまうことである。
→ たとえば田産を寄進することを「詭寄」「投献」といい、身体ごと隷属するのを「投靠」という。「詭寄」はいつわっての寄進を意味するから、不正抑制の意思がみえなくもない。それに対し、いっそう記録に頻出する「投献」「投靠」は、ごくニュートラルな言い回しであり、ありふれた現象だったことがわかる。
- p.210 1.13-14 ダヤンとは「大元」の訛った称謂で、本名は伝わっていない。名前だけでみると、クビライ・モンゴル帝国を想起するものの、その時代のように中原・江南を攻め、征服する意思があったかは疑問である。
→ ダヤンとは「大元」の訛った称謂で、それだけみると、クビライ・モンゴル帝国を想起しかねない。けれどもその時代のように中原・江南を攻め、征服する意思があったかは疑問である。
- p.221 1.18 一五七二年 → 一五七一年
- p.282 1.4 蛮勇に徹せねば → 蛮勇に徹さねば
- p.285 1.14-15 はじまり、湖北・
→ はじまり、農業経営をはじめ豊かな産業史の論述を含む足立 2012、湖北・

逆頁 p.10 1.13 辻原秋穂 → 辻原明穂

逆頁 p.5 左段 「投献 157」と「陶磁器 134」の間に「投靠 157」を挿入

逆頁 p.5 右段 「寧夏の役…」と「農耕…」の間に「農業経営 131, 285」を挿入

逆頁 p.1 左段 「アジア史…」と「足利時代…」の間に「海域—— 289」を挿入

逆頁 p.1 右段 「外夷…」と「海禁…」の間に「海域アジア史 →アジア史」を挿入